篠原熊ノ後遺跡

福岡県前原市大字篠原字熊ノ後所在の遺跡

前原市文化財調査報告書

第 54 集

1994

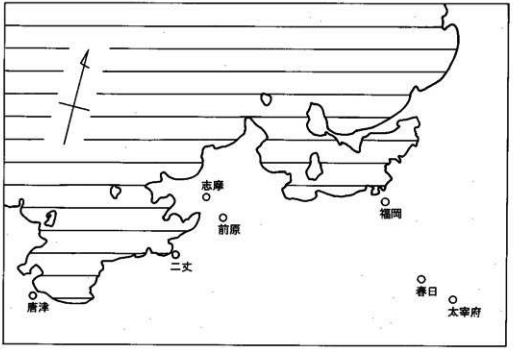
前原市教育委員会

篠原熊ノ後遺跡

福岡県前原市大字篠原字熊ノ後所在の遺跡

前原市文化財調査報告書

第 54 集



1994

前原市教育委員会

序

前原市は福岡市のベットタウンとして着実な進歩を遂げています。平成５年には今宿バイパス開通、また福岡市営地下鉄１号線延長により前原市と福岡空港まで直通となり今後さらなる発展が期待されます。

篠原地区は前原市街地に隣接することから市民の住宅及び公共施設が建ち並ぶ地区であるのと同時に、数多くの文化財がねむっている地域でもあります。今回報告いたします篠原熊ノ後遺跡は民間のマンション建設に先立ち実施した発掘調査の成果です。この調査で数多くの成果をあげることができました。よってこの報告が今後の研究資料の一つとして役立ち、文化財の保護・保存の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査に先立ちご協力くださった関係者の方に対し深甚の敬意を表します。

平成６年３月31日

前原市教育委員会

教育長　樗　木　昭　生

例　言

1．本書は高層住宅建設に伴う前原市教育委員会が行った埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2．本遺跡は、福岡県前原市大字篠原字熊ノ後に所在するもので、その字名をとって篠原熊ノ後遺跡とする。
3．遺構実測は瓜生が行い、製図は柴田由美子・楢崎尚子・中原晴香の協力を得て主に瓜生が行った。
4．遺構写真は瓜生が撮影した。また、遺物写真撮影については岡紀久夫氏から数々の御助言、御助力をたまわった。記して感謝の意を表したい。
5．本書で示した方位は磁北である。
6．本書の執筆は瓜生が行い、山村信榮氏（太宰府市教育委員会）から数々の御助言・御助力をたまわった。記して感謝の意を表したい。
7．本書における第5、9図の▒は焼土域及び焼土層を意味する。
8．本書の編集は瓜生が行った。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査にいたる経過 …… 1
　2．調査組織 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 3
Ⅲ．調査の記録 …… 7
　1．調査の概要 …… 7
　2．第1区の調査 …… 7
　　遺構・遺物各説 …… 7
　　(1). 焼土壙 …… 7
　　(2). 土　壙 …… 8
　　(3). 掘立柱建物 …… 10
　　(4). 柵　列 …… 10
　　(5). 溝 …… 10
　　(6). その他の遺構 …… 11
　3．第2区の調査 …… 13
　　遺構・遺物各説 …… 13
　　(1). 焼土壙 …… 13
　　(2). 土　壙 …… 14
　　(3). 溝 …… 15
　　(4). その他の遺構 …… 16
Ⅳ．まとめ …… 17

挿 図 目 次

第1図、篠原熊ノ後遺跡の位置（1／50,000） …… 2
第2図、篠原熊ノ後遺跡周辺の遺跡（1／5,000） …… 4
第3図、篠原熊ノ後遺跡調査区位置図（1／250） …… 5
第4図、第1区調査区遺構配置図（1／150） …… 6
第5図、第1、2号焼土壙実測図（1／20） …… 8
第6図、第1、2、3号土壙実測図（1／20） …… 9
第7図、第1号掘立柱建物実測図（1／60） …… 11
第8図、第2区調査区遺構配置図（1／150） …… 12
第9図、第1、2号焼土壙実測図（1／20） …… 13
第10図、第1号土壙実測図（1／20） …… 14
第11図、第2号溝土層図（1／20） …… 15

図 版 目 次

図版１、第１区調査区全景（西南から）
図版２、ａ．第１号焼土壙（北から）
　　ｂ．同　　上（南から）
図版３、ａ．第２号焼土壙（北から）
　　ｂ．同　　上（南から）
図版４、ａ．第１号土壙（北から）
　　ｂ．第１号土壙（西から）
図版５、ａ．第２号土壙（東から）
　　ｂ．第２号土壙（西から）
図版６、ａ．第３号土壙（西南から）
　　ｂ．第３号土壙（東南から）
図版７、ａ．第１号掘立柱建物（西から）
　　ｂ．第１号掘立柱建物（南から）
図版８、ａ．第２区調査区全景（西南から）
　　ｂ．第２区調査区全景（近景）
図版９、ａ．第１号焼土壙（北から）
　　ｂ．第１号焼土壙土層（北から）
図版10、ａ．第２号焼土壙（東から）
　　ｂ．第２号焼土壙土層（北東から）
図版11、ａ．第１号土壙（北東から）
　　ｂ．第１号土壙（南東から）
図版12、ａ．第２号溝（南東から）
　　ｂ．第２号溝土層（南東から）
図版13、ａ．第１区調査区第１号溝出土遺物
　　ｂ．第１区調査区第１号焼土壙出土遺物
　　ｃ．第２区調査区第２号溝出土遺物
　　ｄ．第２区調査区畑溝出土遺物

Ⅰ．はじめに

1．調査にいたる経過

篠原熊ノ後遺跡は福岡県前原市大字篠原熊ノ後899－1、899－6、892－1に所在する。

宅地造成の届出が平成3年4月に新栄住宅株式会社、平成5年4月に井上篤幸氏から提出された。これを受けて前原市教育委員会は、この地が周知の埋蔵文化財包蔵地であることを両届出者に連絡した。そこで両者と協議を行い試掘調査を実施した。その結果、焼土壙等の遺構が検出されたため両届出者と協議の上、本調査を行うようになった。平成5年6月に新栄住宅株式会社、平成5年7月に井上篤幸氏と埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を締結し、平成5年7月22日より同年10月6日まで調査を実施した。発掘調査期間中、例年にない長期の降水で調査が遅延し、他事業に支障をおこすような状況であった。

最後に、発掘調査の実施等で文化財保護へのご理解、ご協力をいただいた井上篤幸氏、新栄住宅株式会社には心から謝意を表す次第であります。

2．調査の組織

平成5年度、篠原熊ノ後遺跡の発掘調査事業にかかわる調査の組織は下記のとおりである。

調査主体	前原市教育委員会	
担当	文化課	
総括	教育長	樗木昭生
	教育部長	中原直国
	文化課長	清水義弘
	文化財係長	川村博
庶務	文化振興係長	清水真澄
調査	文化財係主事	瓜生秀文

調査作業　藤森啓子　徳永美根子　藤木綾子　米山八重子　藤森峯子　牧井定代
高橋マツ子　島崎弘子　小金丸利枝　本田タツ子　柳原きみ子　野村松江
菊池ナオ子　吉岡田鶴子　青木輝代　中村照子　平山富士子　柏田睦子
岡田りつ子　中峰幸枝　原野スミ　三島美也子　山崎シナノ　山崎チヨ子
和多治子　横山豊子　久間美佐子

整理作業　柴田由美子　楢崎尚子　中原晴香

第１図 篠原熊ノ後遺跡の位置（１／50,000）

Ⅱ．位置と環境

篠原熊ノ後遺跡は背振山系に源を発する雷山川と多久川に挟まれた舌状台地上に位置する。篠原熊ノ後遺跡の周辺には篠原新建遺跡、糸島高校校庭遺跡、伏龍遺跡があり各遺跡から甕棺墓が検出されている。ＪＲ筑肥線のすぐ北側には上町相原遺跡があり、ここから弥生時代、平安時代、近代の遺構が検出されている。上町相原遺跡の北側には上町向原遺跡、浦志遺跡があり前者から甕棺墓が検出され、後者から小銅鐸を出土している。その他、中世の火葬土壙が検出された上町木下遺跡も同丘陵上にあることから篠原熊ノ後遺跡が位置する丘陵は弥生時代から中世にかけて生活が営まれたことがわかる。

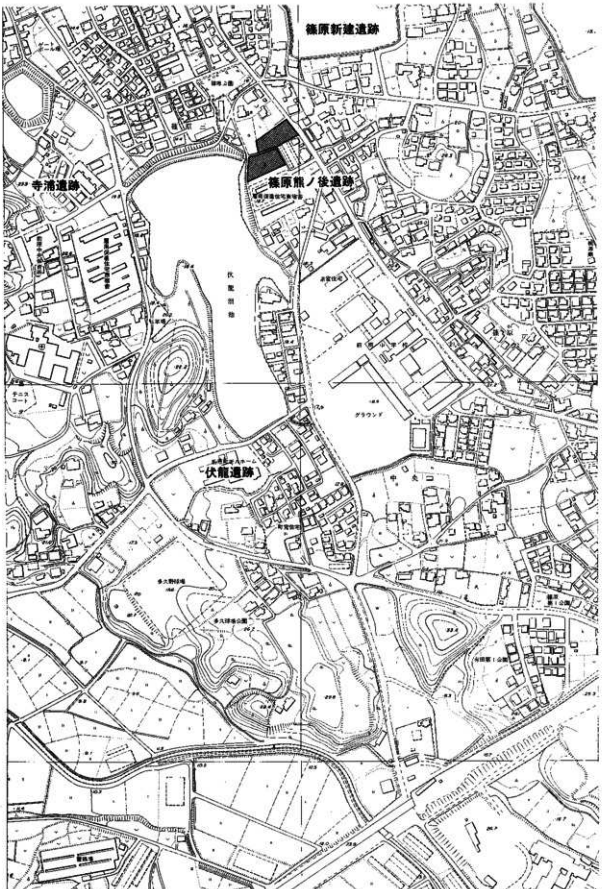
この丘陵の北側には糸島平野がひろがる。糸島平野の標高は３～５ｍ程しかない。そのため今日の今津湾と加布里湾を結ぶ標高の低い平野部は、かって「糸島水道」が通っていたとされていた。しかし、糸島水道の中央部と想定されている地域に志登遺跡群があり、弥生時代から鎌倉時代までの生活遺構が検出されている。また、志登神社もあり『延喜式』には式内社としてその記述がみられる。以上をふまえると当地は弥生時代から鎌倉時代にかけて陸地であっことがわかり、糸島水道の存在に関してはなお検討の余地がある。さらに、北側の志摩町馬場地区では『日本書紀』欽明紀に当時水軍に任わっていたとされる肥（火）君の一派がいたことが推測でき、今後の調査に期待されるところである。

丘陵の東側には今宿バイパス建設に伴い発掘調査が行われた池田遺跡群がある。池田遺跡群の東側には高祖山がそびえ、その西麓に怡土城がある。怡土城は『続日本紀』に記載されており、天平勝宝８（756）年に築城開始され、神護景雲２（768）年に完成したとされている。最初の築城専当官は吉備真備で藤原仲麻呂の巧みな人事により九州に左遷されるが、彼は自分の持てる才をいかんなく発揮してこの築城に当たったと考えられる。築城なかばにして、吉備真備は造東大寺長官として帰京するが、その後任として佐伯今毛人が着任し完成させる。怡土城の北側には福岡市西区周船寺という地名があり『今集解』にみる「主船司」と比定でき、水軍の拠点として対外交渉の地であったとする説もある。

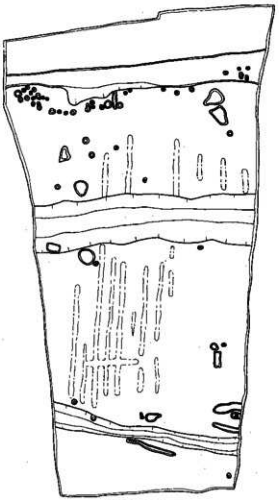
丘陵の南東側には曽根丘陵があり、その丘陵上には平原遺跡、銚瓶塚古墳、狐塚、ワレ塚等からなる曽根遺跡群がある。曽根丘陵の東側には三雲遺跡群があり、天明年間出土の井原ヤリミゾ遺跡、前述した平原遺跡を含む地域は『魏志』倭人伝にみる「伊都国」の中心地であったと考えられる。

丘陵の南側には蔵持古屋敷遺跡、日明古墳群があり、弥生時代から中世にかけての生活遺構、墳墓群等が検出されている。日明古墳群の南側には雷山がそびえ、その中腹に雷山神籠石がある。この雷山を含み西日本には13の神籠石式山城の分布が確認されている。今日まで一部発掘調査が行われ、その結果７世紀代に築城されたと考えられているが、いまだ不明な点が多い。

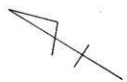
丘陵の西側には、荻浦遺跡群、東遺跡群があり、弥生時代から中世にかけての生活遺構、墳墓等が検出されている。なかでも東遺跡群からは中世の居館等が検出されており、糸島地方における中世の動向を知る上で重要な遺跡の１つとなり得ると思われる。



第２図 篠原熊ノ後遺跡周辺の遺跡（１／5,000）

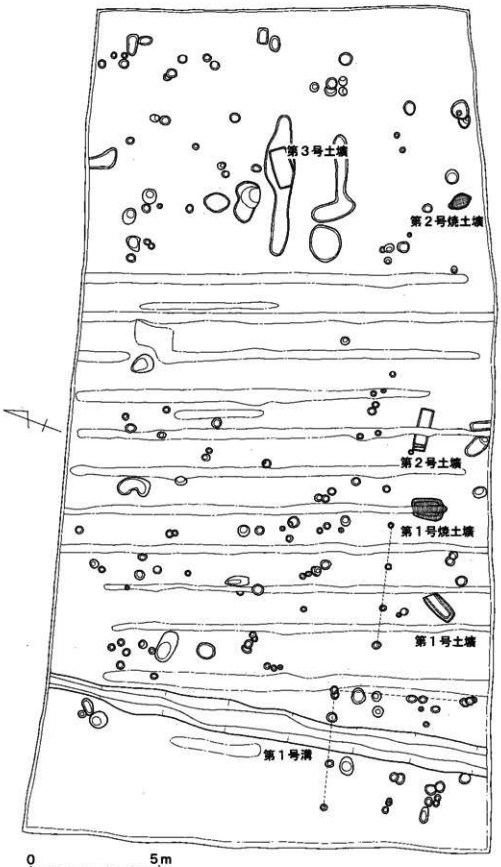


第２区調査区



第１区調査区

第３図 篠原熊ノ後遺跡調査区位置図（１／250）



第４図 第１区調査区遺構配置図（１／150）

Ⅲ．調査の記録

１．調査の概要

今回の調査地点は背振山系に源を発する雷山川と多久川に狭まれた舌状台地上に位置する。Ⅰ章で前述したように、試掘調査で焼土壙等の遺構が検出されたため本調査を実施することにした。調査区を１～２区と設定し調査した結果、第１区で焼土壙２基、土壙３基、掘立柱建物１棟、柵列１列、溝１条等を検出した。第２区では焼土壙２基、土壙１基、溝３条等を検出した。地山は両調査区ともに明赤茶褐色粘質土である。第１、２区の調査終了とともに埋戻しを行った。

２．第１区の調査

第１区発掘調査区は、南北方向に約18.5m、東西方向に約33mからなる台形を呈し、面積は約552㎡になる。調査地点は本来、低丘陵であったと聞く。古くは果樹園、畑として利用されていたらしく多数の畑溝の痕跡が小浅溝として調査区を南東から北西に横切る。遺跡は度重なる開墾・造成によりかなり削平を受けている。それを裏付けるように埋土のなかから土器、陶磁器等を発見できたものの、旧状を維持していた遺構・遺物は少量であった。遺構検出面は明赤茶褐色粘質土でわずか表土から約30cmの深さであった。

遺構・遺物各説

(1). 焼土壙

調査区内で検出した焼土壙は計２基である。長さ100cm前後、幅60cm前後の楕円形もしくは隅丸長方形を呈し、現存深さ５～10cmを測る。この調査区で計５基の土壙を検出しているが、その内壁部に焼土層があり壙内に炭灰物及び焼土が堆積する２基をここでは便宜上焼土壙としている。削平を著しく受けており、その本来の形状は知り得ない。

第１号焼土壙（第５図、図版２）

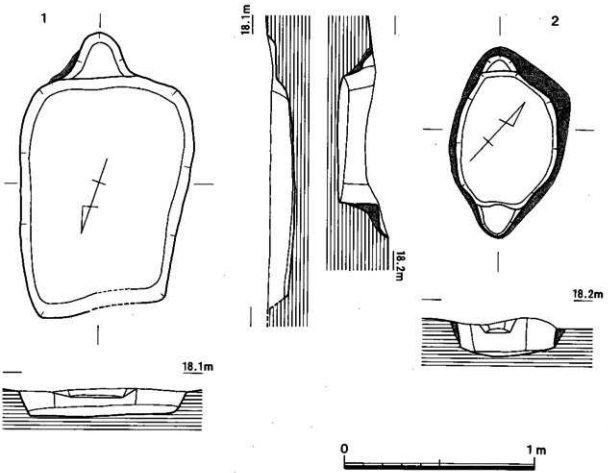
調査区の南端やや中央部に位置する。主軸方向はN－20°－Wに置く。長さ145cm、幅88cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ15cmを測る。遺構上部は著しく削平を受けているためその本来の形状は知り得ない。埋土は炭灰物、焼土を多量に含む黒灰色粘質土である。南端に煙道とみられる張り出し部分がある。土層観察では張り出し部分の東側壁部に厚さ約３cmの焼土層が確認される。壙内から数珠玉が１点出土した。火葬土壙と想定し得る。

出土遺物（図版13）

第１号焼土壙から数珠玉１点が出土した。長さ3.5mm、直径4.5mm、孔径1.5mmを測る。火を受けていないことから遺体を荼毘に付した後供献されたと考えられる。なお、細片であったため図示し得なかった。

第２号焼土壙（第５図、図版３）

第１号焼土壙の東側約15mに位置する。主軸方向はN－42°－Wに置く。長さ100cm、幅60cmの楕円形を呈し、現存深さ20cmを測る。遺構上部は削平を受けているためその本来の形状は知り得ない。埋土は炭灰物、焼土を含む淡黒灰色粘質土である。南北両端に煙道がある。土層観察では壁部に４～６cmの焼土層が確認され、特に煙道の壁部が火を受けたことがわかる。壙内から釘と思われる鉄製



第５図 第１、２号焼土壙実測図（１／20）

品の一部が２本出土した。火葬土壙と想定し得る。

出土遺物

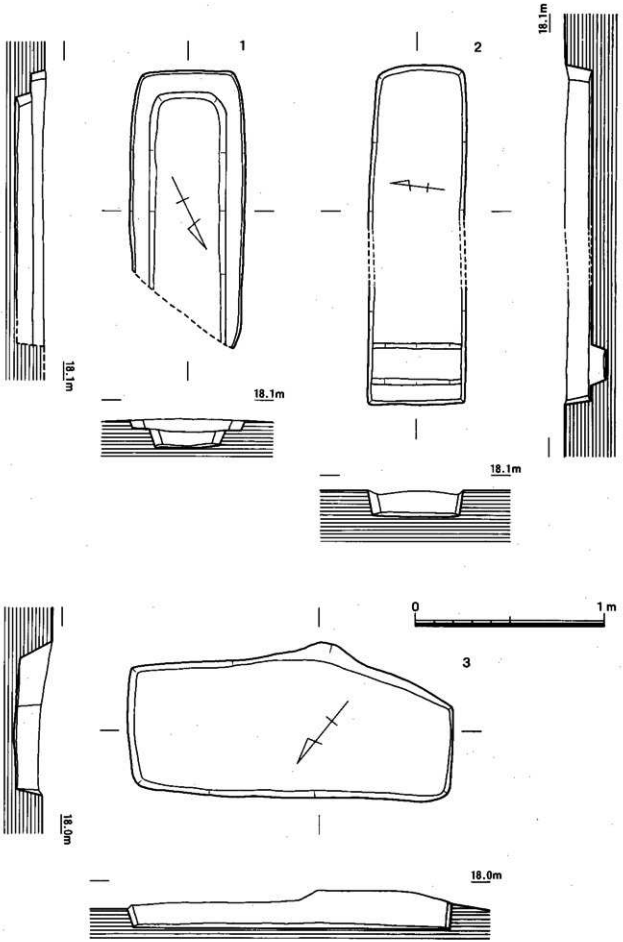
第２号焼土壙から釘と思われる鉄製品の一部が２本出土したが図示し得なかった。棺に使用された釘の一部と思われる。

⑵ 土壙

調査区内で検出した土壙は計５基である。その５基のうち、壁部に焼土層が確認され壙内に炭灰物及び焼土が堆積する２基を除く、残る３基をここでは便宜上土壙としている。長さ170cm前後、幅50cm前後の長方形もしくは隅丸長方形を呈し、現存深さ10～15cmを測る。焼土壙と同様、遺構上部は著しく削平を受けているためその本来の形状は知り得ない。

第１号土壙（第６図、図版４）

第１号焼土壙の西側約３ｍに位置する。主軸方向はＮ－25°－Ｅに置く。現存長さ145cm、幅60cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ15cmを測る。底面は現存長さ130cm、幅50cmを測る長方形を呈し、中央部が若干くぼんでいる。土層観察で木棺と思われる一部分を確認できた。遺構上部は削平を著しく受けているためその本来の形状は知り得ないが、長さ約130cm、幅約50cm前後の木棺を埋置した木棺墓と考えられる。壙内からは遺骨及び供献品等は全く出土しなかった。なお、埋土は淡黒灰色粘質土である。



第6図 第1、2、3号土壙実測図（1／20）

第２号土壙（第６図、図版５）

第１号土壙の東側約5.7mに位置する。主軸方向はほぼ東西に置く。長さ180cm、幅50cmの長方形を呈し、現存深さ15cmを測る。底面は長さ175cm、幅45cmの長方形を呈し、ほぼ水平である。土層観察で木棺と思われる一部分を確認できた。遺構上部は削平を著しく受けているためその本来の形状は知り得ないが、長さ約160cm前後、幅約45cm前後の木棺を埋置した木棺墓と考えられる。壙内からは遺骨及び供献品等は全く出土しなかった。なお、遺構の中央部は近代の攪乱を受けていた。埋土は淡黒灰色粘質土である。

第３号土壙（第６図、図版６）

第２号土壙の北東側約10mに位置する。主軸方向はＮ－40°－Ｅに置く。長さ170cm、幅82cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ20cmを測る。底面は長さ166cm、幅70cmの長方形を呈しほぼ水平である。土層観察で木棺と思われる一部分を確認できた。遺構上部は削平を著しく受けているためその本来の形状は知り得ないが、長さ160cm前後、幅45cm前後の木棺を埋置した木棺墓と考えられる。壙内からは遺骨及び供献品等は全く出土しなかった。埋土は淡黒灰色粘質土である。

(3). 掘立柱建物

調査区内から掘立柱建物１棟を検出した。この他にも掘立柱建物の一部と考えられる柱穴を多数検出したが、後世の攪乱・削平を著しく受けているため建物跡として確認するまでには至らなかった。

第１号掘立柱建物（第７図、図版７）

調査区のほぼ南西隅に位置する。遺構の中央部は、第１号溝できられている。３間×３間の総柱の掘立柱建物であったと考えられるが、後世の攪乱・削平を著しく受けているため西側の柱穴跡は確認できなかった。主軸方向をＮ－16°－Ｗに置く。柱間約1.9mを測る。最南端の柱穴から柱痕と考えられる木片は出土したものの、その他の柱穴から遺物は出土しなかった。なお、最南端の柱穴から出土した木片は細片ばかりで図示し得なかった。

(4). 柵列

調査区内から柵列一列を検出した。この他にも柵列の一部と考えられる柱穴群を多数検出したが、後世の攪乱・削平を著しく受けているため残存状況が悪く、柵列として確認するまでには至らなかった。

第１号柵列（第４図）

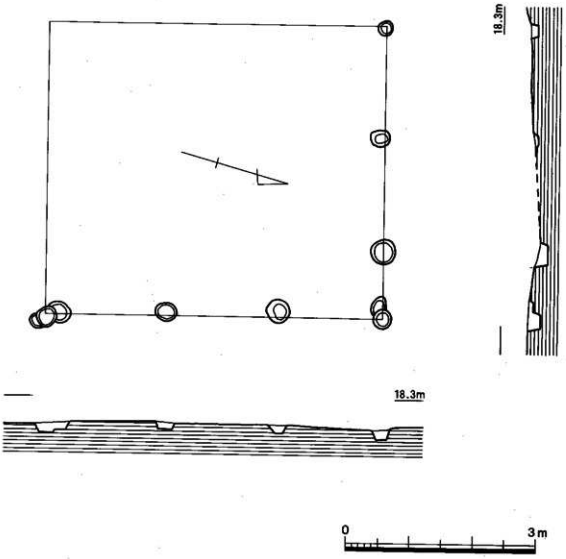
第１号掘立柱建物の東約1.8mに位置する。柱間約1.5mを測る３間の柱列である。柵列の南側には１号土壙、１号焼土壙が位置することから墓域を区別するための柵列の一部であった可能性がある。柱間約1.6mを測る。柱穴から陶磁器片が数点出土したが細片ばかりで図示し得なかった。

(5). 溝

調査区内から溝一条を検出した。この他に近世から現代に至る度重なる造成に伴う多数の溝を検出しているが、ここでは割愛し別項で説明したいと思う。

第１号溝（第４図）

調査区の西端に位置し、第１号掘立柱建物をきっている。主軸方向をほぼ南北に置く。溝の幅は上端で0.6～1.2m、下端で0.2～0.6m、現存深さ0.4mを測る。遺構上部が後世の削平を受けているため本来の形状は知り得ないが断面は逆三角形を呈している。土層観察では茶褐色粘質土のみ堆積

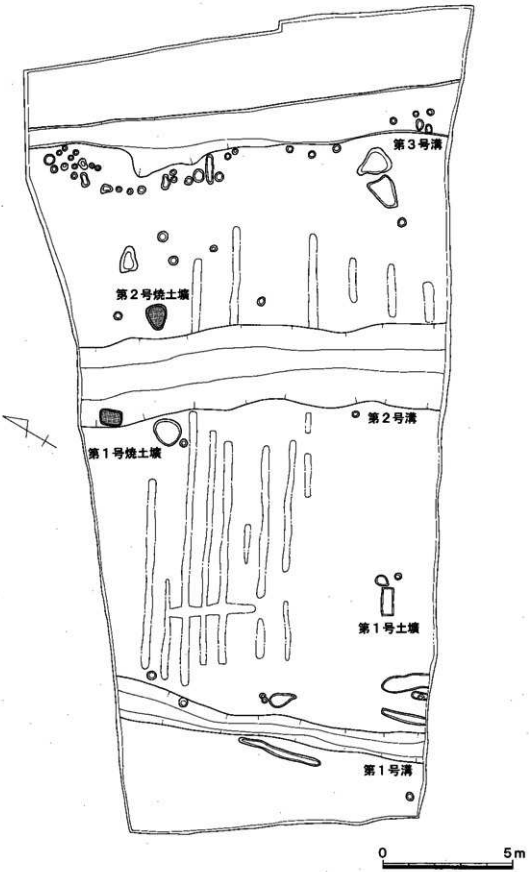


第７図 第１号掘立柱建物実測図（１／60）

していることが確認できる。遺構から陶磁器片等の遺物を出土したが細片ばかりで図示し得なかった。

(6). その他の遺構

その他の遺構として溝状遺構が調査区内に数多く確認できる。この溝状遺は近世から現代に至る度重なる造成に伴う畑の溝跡と考えられる。幅は20～40cm、現存深さ約10cmを測る。遺構間は約1.2mで、主軸を南東から北西方向に置く。遺構から遺物は出土しなかった。また、この調査区は果樹園（桃園）としても利用されていたと聞いており、植林跡と考えられる円形もしくは楕円形を呈する土壙が確認できる。長径約100～150cm、短径90cm現存深さ約30cmを測る。遺構の底から木の根が出土している。



第８図 第２区調査区遺構配置図（１／150）

3．第２区の調査

第２区発掘調査区は、南北方向に約17m、東西方向に約32mからなる台形を呈し、面積は約464㎡になる。調査地点は第１区と同じく本来低丘陵であったと聞く。同じく古くは果樹園、畑として利用されていたらしく多数の畑溝の痕跡が小浅溝として南西から北東に横切る。遺跡は度重なる造成によりかなり削平を受けている。それを裏付けるように埋土のなかから陶磁器等を発見できたものの、旧状を維持していた遺構・遺物は少量であった。遺構検出面は明茶褐色粘質土でわずか表土から約20cmの深さであった。

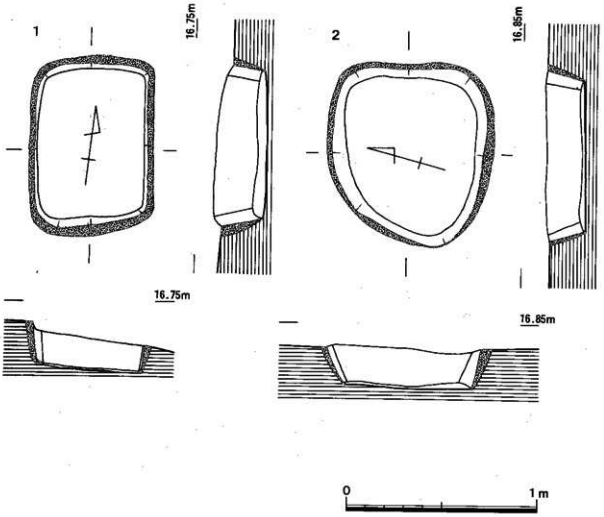
遺構・遺物各説

(1). 焼土壙

調査区内で検出した焼土壙は計２基である。長さ90cm前後、幅60cm前後の楕円形もしくは隅丸長方形を呈し、現存深さ15～20cmを測る。この調査区で計３基の土壙を検出しているが、第１区と同じく壁部に焼土層があり壙内に炭灰物及び焼土が堆積する２基をここでは便宜上焼土壙としている。削平を著しく受けており、その本来の形状は知り得ない。

第１号焼土壙（第９図、図版９）

調査区の北端ほぼ中央部に位置し第２号溝をきっている。主軸方向はN－6°－Wに置く。長さ85cm、



第９図 第１、２号焼土壙実測図（１／20）

幅60cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ20cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。土層観察では壁部に３～５cmの焼土層がみられ、壁部の上部が特に火を受けたことがわかる。壙内からは多量の炭灰物と焼土片が出土し、その中に棺に使用されたと思われる鉄釘の一部も検出された。

出土遺物

第１号焼土壙から釘と思われる鉄製品の一部が３本出土したが細片ばかりで図示し得なかった。棺に使用された釘の一部と思われる。

第２号焼土壙（第９図、図版10）

第１号焼土壙の東約４ｍに位置する。主軸方向はＮ－14°－Ｅに置く。長さ90cm、幅80cmの楕円形を呈し、現存深さ20cmを測る。埋土は炭灰物、焼土を含む黒灰色粘質土である。土層観察では壁部に２～６cmの焼土層がみられ、壁部の上部が特に火を受けたことがわかる。壙内からは多量の炭灰物と焼土片が出土し、その中に棺に使用されたと思われる鉄釘の一部も検出された。

出土遺物

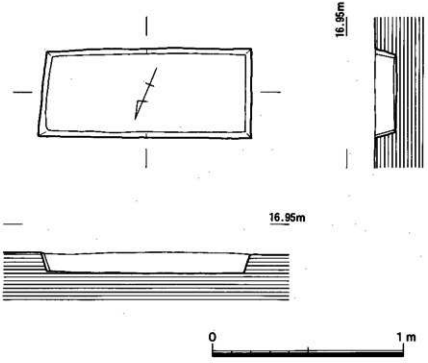
第２号焼土壙から釘と思われる鉄製品の一部が２本出土したが細片ばかりで図示し得なかった。棺に使用された釘の一部と思われる。

(2). 土壙

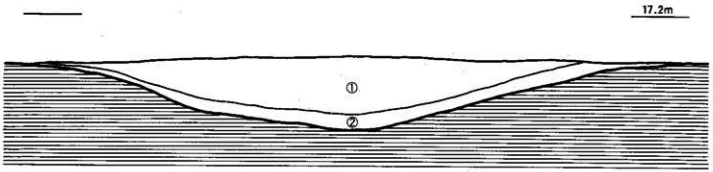
調査区内で検出した土壙は計３基である。その３基のうち、壁部に焼土層が確認され壙内に炭灰物及び焼土が堆積する２基を除く１基をここでは便宜上土壙としている。焼土壙と同様、削平を著しく受けており、その本来の形状は知り得ない。

第１号土壙（第10図、図版11）

第１号焼土壙の南約12.5ｍに位置する。主軸方向はＮ－21°－Ｅに置く。長さ110cm、幅50cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ12cmを測る。底面は長さ105cm、幅41cmを測る長方形を呈し、ほぼ水平である。土層観察で木棺と思われる一部分を確認できた。削平を著しく受けているためその本来の形状は知り得ないが、長さ100cm前後、幅40cm前後の木棺を埋置した木棺墓と考えられる。壙内からは遺骨及び供献品等は全く出土しなかった。なお、埋土は淡黒灰色粘質土である。



第10図 第１号土壙実測図（１／20）



① 暗黒灰色粘質土

② 黄褐色粘質土

第11図 第２号溝土層図（１／20）

(3). 溝

調査区内から溝３条を検出した。この他に近世から現代に至る度重なる造成に伴う多数の溝を検出しているがここでは割愛し別項で説明したいと思う。

第１号溝（第８図）

調査区の西端に位置する。主軸方向をN－26°－Wに置く。溝の幅は上端で1.3～1.6m、下端で0.2～0.6m、現存深さ0.2mを測る。遺構上部が後世の削平を著しく受けているため本来の形状は知り得ないが断面は逆三角形を呈している。土層観察では地山の明赤茶褐色粘質土塊を含む黒灰色粘質土が堆積していることが確認できる。遺構から陶磁器片を出土したが細片ばかりで図示し得なかった。

第２号溝（第8,11図、図版12）

第１号溝の東側約12.5mに位置し第１号焼土壙にきられている。主軸方向をN－30°－Wに置く。溝の幅は上端で2.8～3.0m、下端で0.7～1.1m、現存深さ0.4mを測る。遺構上部が後世の削平を受けているため本来の形状は知り得ないが断面は逆三角形を呈している。土層観察では１層に黄褐色粘質土、２層に暗黒灰色粘質土が堆積していることが確認できる。２層から須恵器片を出土したが細片ばかりで図示し得なかった。

第３号溝（第８図）

第２号溝から東側約7.5mに位置する。主軸方向をN－30°－Wに置く。２号溝とほぼ平行に流れ

る。溝の幅は上端で0.7～1.5m、下端で0.6～1.3m、現存深さ0.1mを測る。第２調査区にある３条の溝で最も残存状況は悪い。土層観察では暗黒灰色粘質土のみ堆積していることが確認できる。遺構から土器等の遺物は出土しなかった。

その他の遺構

その他の遺構として溝状遺構が調査区内に数多く確認できる。この溝状遺構は近世から現代に至る度重なる造成に伴う畑の溝跡と考えられる。幅は20～40cm、現存深さ約15cmをを測る。遺構間は約50cmで主軸を北東から南西方向に置く。遺構から明治時代の５銭貨が出土している。この調査区も果樹園として利用されていたと聞いており、植林跡と考えられる円形もしくは楕円形を呈する土壙が確認できる。長径約100cm短径150cm、現存深さ約90cmを測る。さらに、第３号溝の西端には多数の柱穴が検出されており、第２号溝との関係上注目に値すると思われる。

Ⅳ. ま と め

今回の調査で奈良時代から近代にかけての遺構を検出したが、このうち焼土壙及び溝についてまとめてむすびとしたい。

(1). 焼土壙

第１、２調査区で計４基の焼土壙を検出した。第１区から検出した第１号焼土壙から数珠玉、第２号焼土壙からは棺に使用されたと思われる鉄釘の一部が出土している。第２区から検出した第１、２号焼土壙からも棺に使用されたと思われる鉄釘の一部が出土している。以上から、検出された計４基の焼土壙は火葬土壙と想定し得る。

火葬土壙は検出状況から大きく２つに分類できる。１つは壙内に棺台を置くもの、もう１つは壙内に棺台を置かないものである。

壙内に棺台を置く火葬土壙は、壙内に数個の石もしくは棺台になり得る物を置き棺台とし、その上に棺を置いて荼毘に付したと考えられる。この類の遺構は奈良尾遺跡（南2）・上町木下遺跡（南3）から検出されている。遺構は長さ100cm前後、幅60cm前後の楕円形もしくは隅丸長方形を呈する。遺構の底部に棺台を置くため、壙内に棺台を置かない遺構に比べ火の通りが良く、土層観察で底部から壁部にかけて焼土層が確認されやすい。遺構は長さ100cm前後、幅60cm前後の土壙のため、使用される棺は長さ約100cm、幅約60cm程度のもの以下でないと収まらない。その上、土壙内における通風や棺材の厚さを考慮すると内法はかなり小さなものとなり、かなり窮屈な状態で遺体が棺に収められたと想定し得る。この状況から成人の遺体を伸展した状態で棺に収めて荼毘に付すことは不可能であり跏坐した状態で遺体を棺に収めて荼毘に付したと思われる。

ところで、今回の調査で検出された計４基の遺構から棺台は検出されなかった。棺台がない理由として、拾骨の際に棺台まで取りのぞかれたか、もしくは削平の際に棺台まで消失してしまったとも考えられる。しかし、篠振遺跡（南2）、上町木下遺跡、一ノ谷遺跡（南3）から壙内に棺台を置かず壙上に太い木材を用いて棺台としたと想定し得る遺構が検出されている。この類の遺構の特筆すべき点として土層観察で壙内に棺台を置く遺構と比べ、焼土層があまり確認されないことがある。後世の削平を受け遺構本来の形状を知り得ないため明確なことはいえないが遺構の壁部・底部における被熱度が極めて軟弱であり、遺体の火葬が完遂できたとは想定でき得ないものが多い。勿論、遺体の燃焼方法的にみれば酸化焔による直火型のものと、蒸焼き的な密閉式の還元焔による方法が考えられるが、そのいずれを採用しても充分な焼土層を形成しているとはいえない。以上から想起できることは、遺体の火葬方法として死後の時間経過が短期の場合と、長期間を経た場合が考えられる。火葬はいうまでもなく仏教思想に伴って広く展開したものであり、奈良時代をへて中世に至っては庶民間にも流行する。『玉海』に文治４年（1188年）２月28日内府（藤原良通）の言葉として「火葬は功徳あり。土葬は甘心せず。」とあり、火葬がいかに仏教思想のもとに人々の心に受け入れられていたことが想起できる。しかし、その反面、『權記』寛弘８年（1011年）７月11日条に「納言在世の日、もともと火葬を許さず。」とある。また、『日本霊異記』に「我が身を焼くことなかれ。７日置け。」（第16）とか「丙の年の人の故に、焼き失わずといいて点じて塚を作り、殯して置く」（第12）という記事もあり宗派のちがいもあったかもしれないが必ずしも火葬は「功徳」あるとは限らず土葬に対し

ても根強い愛着がいだかれていたことがうかがわれる。このことを考慮に入れると、遺体の火葬方法として死後の時間経過が長期間を経た場合も考えられ、一度土葬し遺体を腐爛状態、もしくは白骨化してから茶毘に付す方法もあったと考えられる。篠原熊ノ後遺跡から検出された計４基の遺構は検出状況から考えてその類の遺構に属する可能性があり、第１区においては隣接して木棺墓が検出されているのも注目に値する。なお、棺台を壙内に置かないため使用される棺は土壙にその方量を制限されるとは限らない。よって、壙内に棺台を置かない遺構は遺体を蹲坐した状態で茶毘に付す必要はなく、伸展した状態でも茶毘に付すことが可能であったと考えられる。

最後に遺構群が使用された年代であるが、４基のなかでその年代を示す遺物を埋納していたのは唯一第１区から検出された第１号焼土壙だけであった。それも数珠玉１点のみで年代を示す土器等が出土しなかったため不明な点が多く、年代を想定するまでには至らなかった。今後の周辺地区での調査に期待するところが多い。

(2). 溝

第１、２調査区で計４条の溝を検出した。このうち第２調査区から検出された第２、３号溝についてまとめておわりとする。

第２、３号溝に関して注目すべきことは両遺構がほぼ平行に流れることである。さらに第３号溝の西端には土留め、もしくは境界を示したと考えられる柵列が一部検出されている。以上から第２、３号溝を側溝ととらえると遺構間は道路遺構となり得る可能性がある。同時期の類例として前田遺跡[注⑤]がある。この前田遺跡から路面幅約９ｍ、側溝幅約２ｍの官道とみられる直線道路跡が検出されている。その側溝の両脇には路面保持の施設と思われる柱穴群をも検出されている。

ところで、奈良から平安時代にかけて糸島平野においては条里制[注⑥]が施行されたとされている。第２区から検出された第２、３号溝の主軸方向はＮ－30°－Ｗに置き、条里地割の方向軸と近い方位を示す。このことから、条里制との関係がうかがわれる。ただし、今回の調査区域が限られており遺構からの出土遺物も細片ばかりであったため未だ不明な点が多い。今後の周辺地区での調査に期待するところが多い。

参考文献

注①　中間研志編「奈良尾遺跡」（福岡県教育委員会・1991年）

注②　瓜生秀文編「前原地区遺跡群Ⅲ」（前原市教育委員会・1993年）

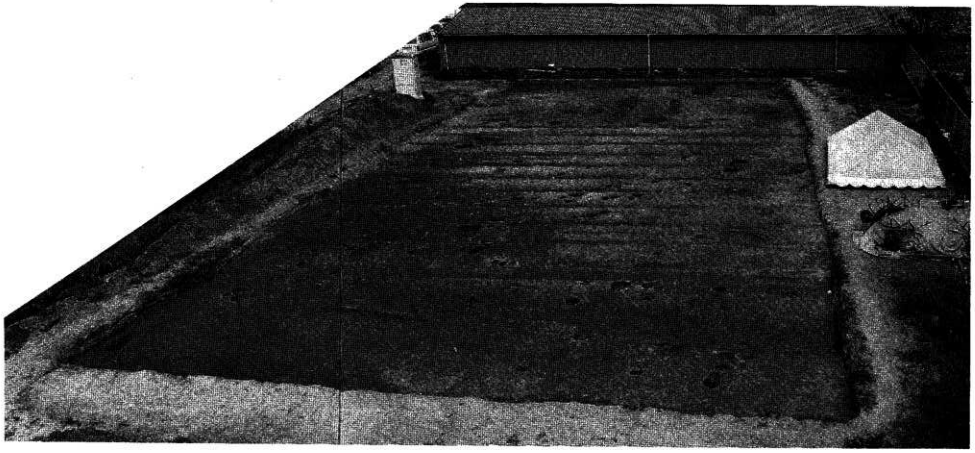
注③　山本信夫・狭川真一編「篠振遺跡」（太宰府市教育委員会・1987年）

注④　加藤恵子他編「一ノ谷中世墳墓群遺跡」（磐田市教育委員会・1993年）

注⑤　山村信榮「大宰府周辺の古代官道」（『九州考古学』第68号　1993年）

注⑥　日野尚志「筑前国怡土・志麻郡における古代の歴史地理学的研究」（『佐賀大学教育学部研究論文集』第20集　1972年）

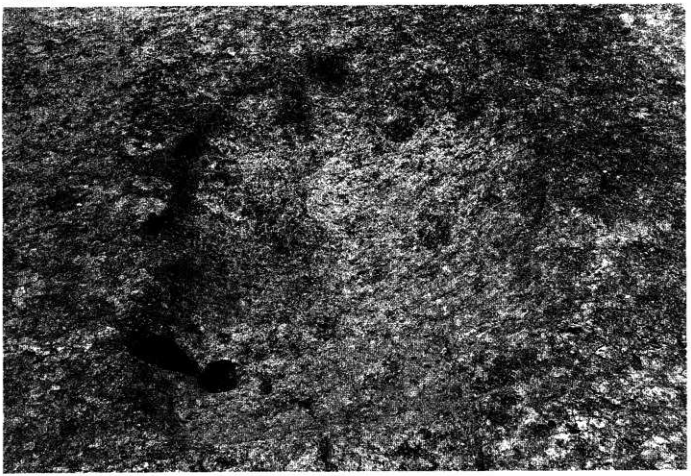
図　　版



第1図

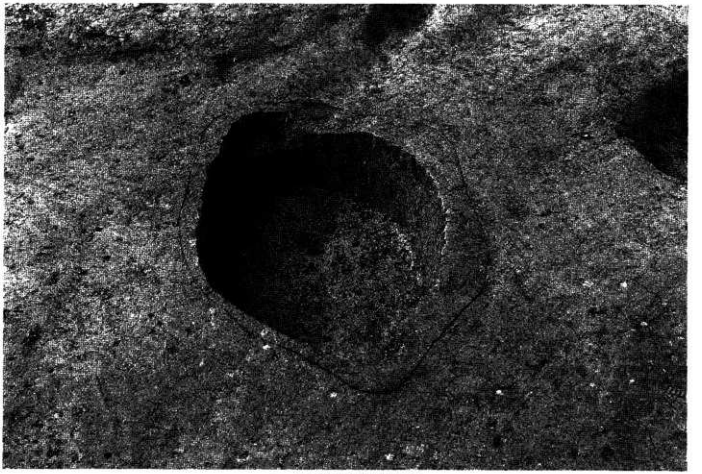
第1区調査区全景（西南から）

図版2

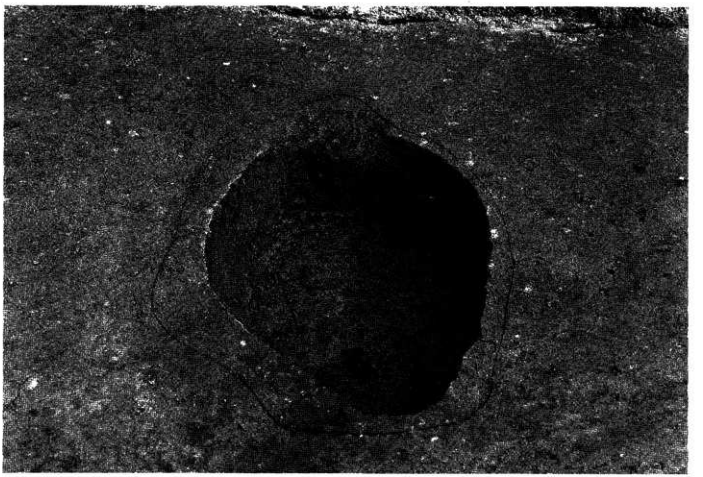


a．第1号焼土壙（北から）

b．第1号焼土壙（南から）



ａ．第２号焼土壙（北から）



ｂ．第２号焼土壙（南から）

図版4

a．第1号土壙（北から）

b．第1号土壙（西から）

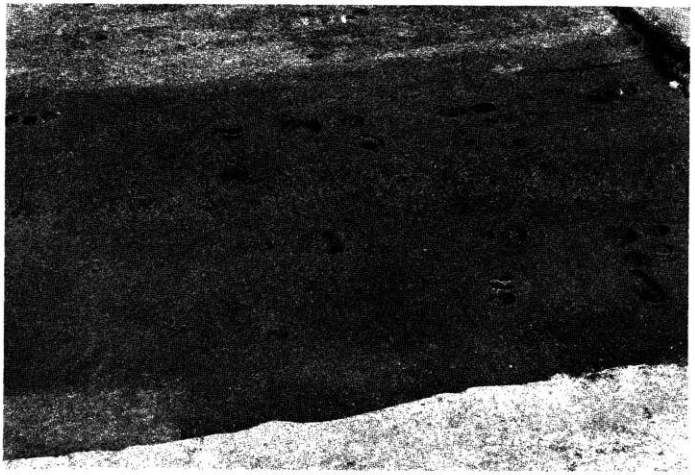
a．第2号土壙（東から）

b．第2号土壙（西から）

図版6

a．第3号土壙（西南から）

b．第3号土壙（東南から）



a．第1号掘立柱建物（西から）

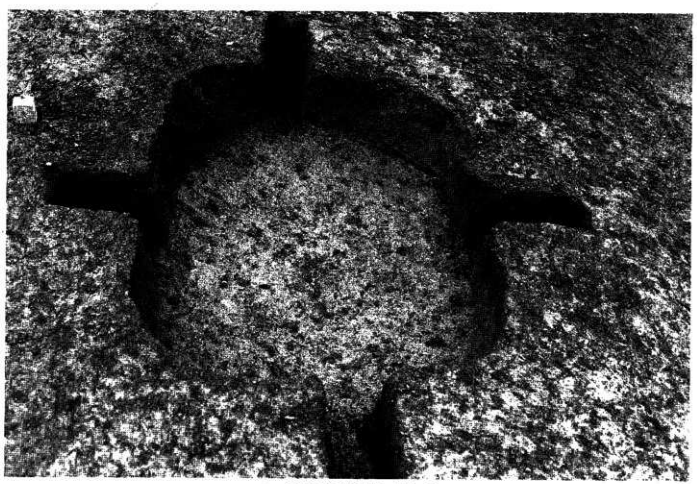
b．第1号掘立柱建物（南から）

図版8

a．第2区調査区全景（西南から）

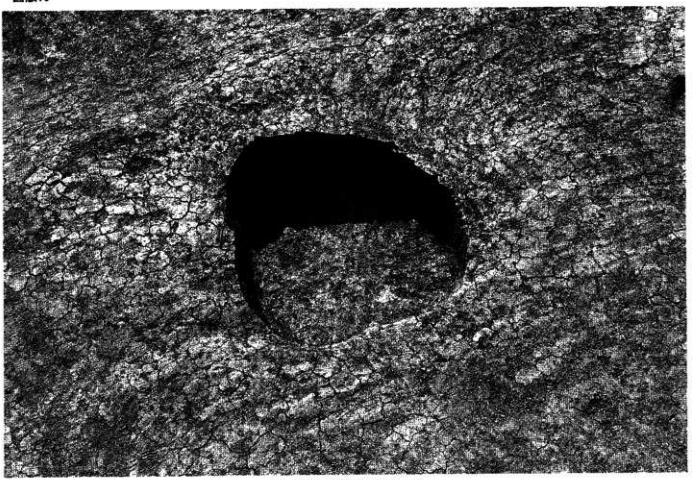
b．第2区調査区全景（近景）

a．第1号焼土壙（北から）



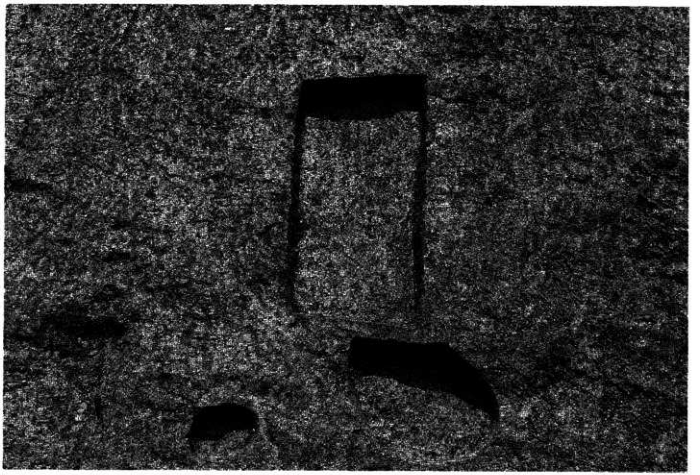
b．第1号焼土壙土層（北から）

図版10



a．第２号焼土壙（東から）

b．第２号焼土壙土層（北東から）



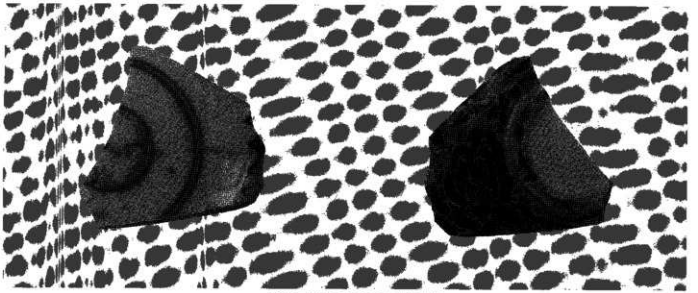
a．第１号土壙（北東から）

b．第１号土壙（南東から）

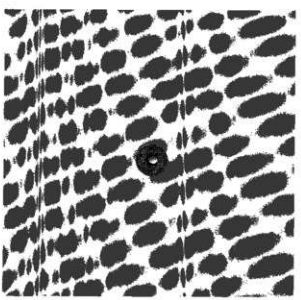
図版12

a．第２号溝（南東から）

b．第２号溝土層（南東から）

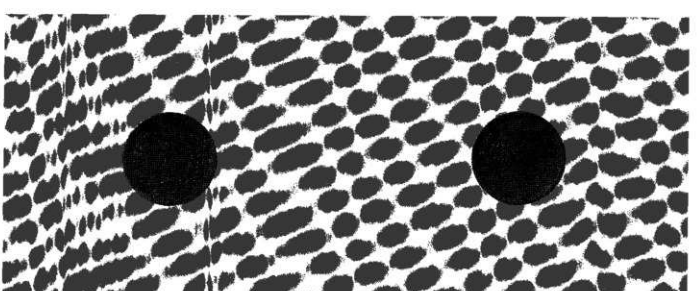


a．第１区調査区第１号溝出土遺物



b．第１区調査区第１号焼土壙出土遺物

c．第２区調査区第２号溝出土遺物



d．第２区調査区畑溝出土遺物

報　告　書　抄　録

フリガナ	シノワラクマノウシロイセキ
書名	篠原熊ノ後遺跡
副書名	福岡県前原市大字篠原字熊ノ後所在の遺跡
巻次	
シリーズ名	前原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第54集
編集者名	瓜生　秀文
編集機関	前原市教育委員会
所在地	福岡県前原市篠原熊ノ後899－1，899－6，892－1
発行年月日	西暦 1994年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
篠原熊ノ後遺跡	前原市大字篠原熊ノ後899-1，899-6，892-1			33°33′	130°12′	1994.7.22～10.6	1016	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
篠原熊ノ後遺跡	複合遺跡	奈良～中世	焼土壙　4基 土壙　4基 堀立柱建物　1軒 溝　4条	須恵器・陶磁器	

篠原熊ノ後遺跡

前原市文化財調査報告書　第54集

発行　前原市教育委員会
福岡県前原市大字前原623番地

印刷　隆文堂印刷株式会社
北九州市門司区畑田町1－1